

使部清人

昭和48(1973)年大宰府史跡第26次調査は、政庁地区正殿後方築地東北隅すみにおいて実施されました。すでに第15次調査によって正殿後方を取り囲む施設が築地であったことは判明していましたが、この調査はその規模・構造等を明らかにすることが目的でした。

その過程で、5つの地点(A～E)から木簡計930点が出土しました。これらのうち、D地点から出土したもののひとつが次の木簡です。

・「帥郷御料□□卅三所カ」
・「使部清人」

これは、この調査で出土した木簡のなかでは唯一完形で、また上端左右に切り込みをもつ、いわゆる付札木簡つけふだもっかんと呼ばれるものです。まずは裏面の「使部清人」という記載に注目してみましよう。使部とは雑務に携わる下級職員のことです。大宰府における使部は文献史料にもみえ、この木簡によってもその存在が確認できるのですが、問題はここには名前しか記されていないということ。こうした「職名十名」の記載形式は、姓を記さなくても本人を同定できる

大宰府人物志

資料室だより²⁹

という意味で、ごく限られた範囲・組織のなかで勤務していたのではないかと考えて、清人の配属先を大宰帥の家政機関と推定する説があります。そして出土地点である正殿後方地区には、大宰帥の日常的な執務の場、あるいは出仕中の居所を想定するといふ考え方です。

次に表の記載です。当初の積文しやくもんでは「帥郷御料六端卅二□□」と積読され、ろくたんさんじゅうにと読み取られていました。しかし、近年の積文では前記のように変更されています。「六端」と読まれていた箇所は、ここには品目名が記されるのが普通であるとして「□□」衣カと改められています。ただし、2字目が「郷」とされていますが、写真で見ると「卿」と読めます。また「卿」の方が意味も通じますので、それによいと思います。わたくし自身も福岡市の鴻臚館跡出土木簡の積文再検討に参加して、いくつかの読みかえを経験したことがあります。こうしたいわゆる出土文字資料の再検討には、いろいろと困難な問題も伴いますが、今後、これらの再整理・再検討は大宰府史跡の解明のためにぜひとも必要なことです。